生涯学習情報誌
Life Learning

3 2018 Mar. NO.331

生涯学習開発財団

キッチンの科学プロジェクトに〝生涯学習開発財団賞〟●健康食育アワード2018

（一社）日本健康食育協会が主催する『健康食育アワード２０１８』が、２月22日、東京・中央区の日本橋公会堂にて開催された。前回の２０１６年に引き続き、生涯学習開発財団賞（金賞）を贈呈したほか、今回は事業部長の佐藤梨奈が審査員も務めた。

協会の柏原ゆきよ代表理事は「健康は人生の財産。日本型食生活による健康の推進と、食育を通じて社会の健康問題解決を目指す方々を応援したい」と、当アワードの目的を訴えた。

基調講演には岡山県総社市の片山聡一市長が登壇。注目されているユニークな改革の一部を紹介した。市民の健康意識向上のため、健康保険を年間に1円も使わなかったら1万円キャッシュバック。それにより市の医療費が3・5億円減った。4月からは万歩計を配布し、歩数によって商品券がもらえる制度も始める。市内の小規模農家の野菜を学校給食に用い、子どもの食育にも貢献する「地・食べ」。他にも、障害者就労率日本一、市内15小学校の昔の給食カレー（レトルト）発売など、斬新な政策を実現してきた。市の支出の42％は医療費。健康を推進して医療費を減らさないと他の自治サービスができないと、反対派を説得する。

アワードのファイナリスト8名の最初には、財団協賛会員のNPO日本成人病予防協会が登場し、スポンサー賞を受賞した。金賞・生涯学習開発財団賞は、キッチンの科学プロジェクト代表の金子浩子氏に贈られた。大賞・日本健康食育協会賞は、アグリマス㈱代表の小瀧歩氏。失敗を乗り越え、日本一食にこだわるデイサービス経営の取り組みで、オーディエンス賞とのダブル受賞を果たした。

→ご挨拶をする柏原ゆきよ代表

↓片山聡一総社市長のユニークな政策を拝聴。

↓今回は財団事業部長・佐藤梨奈が審査員も務めた。

↑日本成人病予防協会の安村禮子氏（右）がスポンサー賞を受賞。

←佐藤梨奈からキッチンの科学プロジェクト代表の金子浩子氏に、金賞・生涯学習開発財団賞を贈呈。

↑大賞・オーディエンス賞同時受賞の小瀧氏（右端）と審査員一同。

ファイナリスト

キッチンの科学プロジェクト　金子浩子
食育＋科学＋ワークショップで、誰もが主役の双方向の食育活動をしている。摂食障害で苦しむ自分を救ってくれた食育で恩返しをしたい。

らでぃっしゅぼーや㈱　清水崇司
食の安心安全に力を入れる同社は、保育園給食を通じた食育イベントなどを実施。保育園職員の省力化も合わせた導入しやすい提案がポイント。

㈱新生堂薬局　山本愛子
ドラッグストアにいる「地域で一番身近な栄養士」として、すこやかウォーク、赤ちゃんフェスタ、健康測定会、会員制の対面指導などを実施する。

NPO法人日本成人病予防協会　安村禮子
小学生低学年向けに「バナナうんちで元気な子！」と題し、クイズやダンスを取り入れた、食事や生活のリズムの大切さを学ぶ出前講座を実施。

アグリマス㈱　小瀧 歩
デイサービスの食事充実を目指して何度も事業に失敗してきたが、あきらめず、食事＋運動の「健康TV」を成功させ、その利益で食事充実を実現。

（一社）MOAインターナショナル　小菅豊弘
バランスの良い日本型食生活の継続を中心に、食育資格者の養成や食育講習を行う。国のH30年の目標値を講習参加者はすでに達成している。

（医）ミオ・ファティリティ・クリニック　長山詔子
ママになるなら「みおごはん」と題して、天然だしなど和食を中心に、妊娠を望む女性を食生活から指導。院外でもメニュー提案など活動する。

（一社）食アスリート協会　鬼塚そのみ
40日間の女子陸上オリンピアンチームの合宿に帯同。糖質制限など食べない体調管理から食べる体調管理への転換を指導し、記録更新にも寄与。

■第24回　LLメンバーズ交流会　報告

「松田妙子理事長は、人生100年時代構想の良きお手本です」（来賓ご挨拶より）

↓津軽三味線の力強い演奏から、←篠笛の郷愁的な音色。

←小林史明衆議院議員による乾杯のご発声。

↓司会は岸田さん。

↑90歳でも生き方は変えないと力強く宣言。

約100名もの会員の皆さまおよび関係者がご来場くださいました。

あちこちに新しい出会いや不思議なご縁がありました。

各分野の第一人者など多彩な才能が集結しています。

↑財団協賛会員の代表者を皆さまにご紹介。

2017年度のLLメンバーズ交流会は1月31日、東京・虎ノ門の霞山会館で行われた。冒頭、生涯学習開発財団理事長の松田妙子がご挨拶。「内閣府が推進するエイジレスライフ。年を重ねても年齢にとらわれずに、自分の責任と能力で自由に生き生きとした生活を送ることです。私は90歳になっても、そのスタイルを貫いています。皆さんも実践されている方々ですが、これからもぜひ継続してください」と鼓舞した。

乾杯の音頭をとっていただいた総務大臣政務官・内閣府大臣政務官の小林史明衆議院議員は、「内閣府では人生100年時代構想会議において、超高齢社会を見据えた、経済、社会システムを実現するためのグランドデザインの検討を行っています。そのポイントは、働き方改革と学び直しをセットで推進していくことで、まさに松田理事長がお手本です。いくつになっても学び直しができ、新しいことにチャレンジできる社会の実現を目指したいと思います」と述べた。

歓談中、昨年10月3日の「松田理事長卒寿のお祝い」（本誌2017年11月号掲載）で挨拶をする福田康夫元総理など、会の模様がスライドで流された。

「ようこそ！ 和楽器の世界へ」

■6月号から本誌でシリーズ開始予定

AUNが監修・紹介します

交流会で演奏してくださったAUNのお二人が監修し、仲間の和楽器奏者が魅力を語ってくれます。

AUNから▶「今日のように楽しく和楽器の音を聴くのは初めてという人も多いでしょう。まずは自分の耳で聴いて、その音色を自分の中に取り込んでもらいたいのです。和楽器は珍しいものから、少し身近な存在になったのではないでしょうか。かしこまって聴く必要はなく自然体で向き合って、笑いが出た「AUN三味線」のように楽しんで聴いてください。昨年末に三井ホールで行ったAUN-Jクラシック・オーケストラのライブには多くの子供たちも来場しました。ぼくたちは学校訪問もやりますし、ジブリ映画の音楽もレパートリーに入れています。そうやって子供の頃から興味を持ってもらい、広い層に和楽器の魅力を伝えていこうとしています。生涯学習という取り組みをされている中での今度の連載は、とても有意義と感じています」

●AUNプロフィール

井上公平・良平の双子兄弟。高校3年生だった1988年、和太鼓集団・鬼太鼓座（おんでござ）に出会い、手伝いで帯同した海外公演の途中から団員として登用され、ステージでも喝采を浴びる。2000年に独立し「AUN」を結成。2009年には、邦楽界で活躍する若手を集めて、もっとシンプルに、もっとかっこよく和楽器の素晴らしさを伝えていくプロジェクト「AUN-Jクラシック・オーケストラ」を結成。「音楽に国境はない。しかし国籍はある」との思いから和楽器の可能性を追求し、日本文化を世界に発信している。国内外で演奏活動を行い、現在まで公演回数は1400回を超える。2011年には「文化庁文化交流使」に任命されている。それまでアメリカ、ヨーロッパは演奏ツアーで頻繁に訪れていたが、未体験だった東南アジアの各地を文化交流使として訪問。演奏とともに現地楽器のミュージシャンらとの交流を深めた。それ以来、活発に交流し、各国のミュージシャンが参加する「ONE ASIA ジョイントコンサート」として、アンコールワットや、世界5大劇場のひとつシンガポールのエスプラネードホールなどで開催している。

※文化交流使は、世界の人々が日本文化への理解を深める活動や、外国の文化人とのネットワークの形成・強化に繋がる活動として、文化庁が指名し世界各地へ派遣している。

これが、AUN三味線！

この見開きに博士が何人いるでしょう？博士号取得支援事業関係者も多数来場され、ステージで張競先生から紹介。

↑驚きのAUN三味線に大きな拍手が止みません。

↓『花戦さ』の著者で本誌新連載を始める鬼塚忠氏。

→お開きとなり、財団事業部長の佐藤梨奈から感謝のご挨拶。

↑「日本の技」の工芸家の方々は会場でも人気。

今回のステージには、三味線と篠笛を奏でる双子ユニットAUN（井上良平・公平）が登場し、津軽三味線の激しい演奏と篠笛の美しい音色を披露した。クライマックスはテレビやライヴでも大人気の「AUN三味線」。双子ならでは阿吽（あうん）の呼吸で、2人で1つの三味線を奏でる絶妙のトリック演奏を見せ、場内から驚嘆の声と大きな拍手が起きた。

その後、来年度から本誌の新シリーズ「鬼の学び」をご寄稿いただく鬼塚忠氏を紹介。著書『花戦（いく）さ』は、安土桃山時代の華道家・池坊専好と秀吉の戦いを描いた物語で、昨年、野村萬斎主演で映画化され、日本アカデミー賞では作品賞など8部門の候補にもなっている。

協賛会員紹介では6社・団体にご登壇いただき、代表で日本成人病予防協会の安村禮子様からご挨拶をいただいた。

本誌「日本の技」登場者の中から、坂和清（友禅染）、雨宮弥太郎（硯）、竹花万貴（金工・刺繍）、奥村公規（金工）の各氏にご登壇いただき、スクリーンに映した作品写真とともに紹介した。

博士号取得支援の合格者も多数参加されていた。最後に、博士号取得支援事業の選考委員長である張競先生から「7年目を迎え、50歳～78歳の55名の方を支援し、内30名がすでに博士号を取得した」との現況が報告され、新たな博士号取得者らを紹介した。

すこやかネット研究会（代表／京都造形芸術大学芸術教育資格支援センター専任講師：濱元伸彦さん）

子どもたちの明るい笑顔と未来のために、今、できること

学校と地域の協働を支える調整組織の評価に関する研究

―大阪府の「すこやかネット」に焦点を当てて―

■ **自治体がすすめる事業の評価機関として**

教育社会学を専門とする濱元伸彦さん（京都造形芸術大学専任講師）と高尾千秋さん（元神戸大学助教）が共同代表を務める「すこやかネット研究会」は、大阪府の総合的教育力活性化事業として設置された地域教育協議会「すこやかネット」（以降「すこやかネット」）を支援するための民間評価機関としての役割を担っている。

大阪府の「すこやかネット」は、濱元さんの恩師でもある故・池田寛氏（元・大阪大学大学院教授）が提唱した教育コミュニティづくりの実践として平成十二年度にスタートした。大阪府では、教育を縁に地域の子ども同士、子どもと大人、大人同士が交流することで、「顔と名前が一致する人間関係」を育む中で、0歳から15歳の子どもの連続した成長を見据えた取り組みをすすめている、という。中学校区を単位に「すこやかネット」という地域連携組織を設置し、各地域の教育活動が促進され、創設から3年で大阪府内の全中学校区（大阪市を除く334中学校区＝当時）への設置が完了した。

平成13年から5年間、池田寛教授も支援に加わり、リーダー育成のための「地域コーディネーター養成講座」を開講、濱元さんも大学院生時代に講座に携わった。その後、事業開始から17年余りが経過し、組織の形骸化や財政難などで活動が停滞するのを危惧した濱元さんたちは、平成27年に「すこやかネット研究会」を発足。同研究会では「すこやかネット」の現状を把握、子どもや学校への影響・効果を明らかにし、今後の教育コミュニティづくり支援の方策を検討している。

■ **成長の見守りが大人の生きがいづくりにも**

各校区の「すこやかネット」では、学校を地域に開放して、学習・体験プログラムや各種イベントを開催している。子どもの参加が多い体験活動プログラムでは、大人がこれまで習得してきた技術や学び・遊びを子どもたちに伝えることで、世代間コミュニケーションの楽しさ、生活の張り、生きがい、喜びが生まれ、これが生涯学習の活性化に繋がっている。子どもの方でも、地域の様々な大人と接することで指標が見え、新たな生涯学習者となる良い機会になっている、と濱元さんは考えている。

■ **「すこやかネット」活動の手法を開発**

実は、大阪府内でも活発に活動している地域とそうでない地域がある。「すこやかネット研究会」では、活発な地域を訪ね、参与観察やヒアリングを行い、成功事例を検証することで、教育コミュニティづくりの手法を検討してきた。また、平成29年には、生涯学習開発財団からの助成金を用いて、大阪府内の学校・地域関係者に向けて大規模なアンケート調査を実施しており、現在その集計を進めている。結果分析で得られた成果は、自治体の研修会等で利用する他、準備中の同研究会ホームページでも公開していく予定だ。これまで教育コミュニティづくりの実証的な評価手法がなかっただけに、大阪府に限らず全国レベルで活用していけるものと期待が寄せられている。

「教育コミュニティ」づくりとは

教育や子育てに関する課題を学校、家庭、地域住民が共有し、課題解決に向けた協働の取組みを通じて、新たな人のつながりをつくり出していく仕組みや運動をいう。

（組織図提供:大阪府）

「地域教育協議会（すこやかネット）」の組織・構成例

中学校区

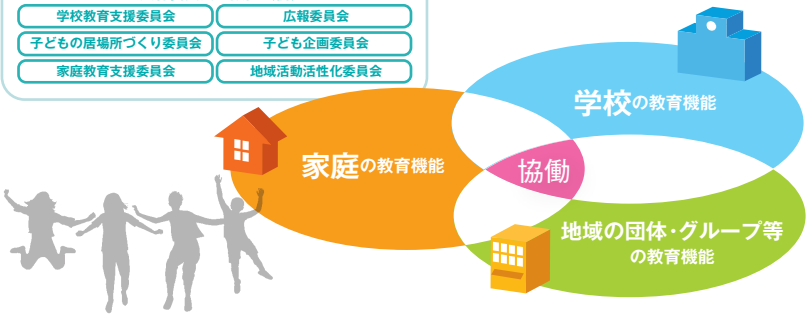
地域教育協議会

コーディネーター／スタッフ会議／事務担当者

全体会議
- 学校関係者
- 幼稚園・保育所関係者
- PTA 関係者
- 青少年育成団体
- こども会関係者
- 自治会関係者
- 地域住民
- 社会教育関係者
- 子ども家庭サポーター
- NPO
- 福祉協議会関係者
- 企業関係者
- 行政関係者
- 大学生　など

実行委員会の設置（例）

学校教育支援委員会	広報委員会
子どもの居場所づくり委員会	子ども企画委員会
家庭教育支援委員会	地域活動活性化委員会



大学院時代「学校と地域社会の協働」をテーマにフィールドワークを行う。アメリカ留学で教育研究の調査法や教育政策論を学んだ後、中学校教諭を6年務め視野を広げた。現在は京都造形芸術大学で教職課程の指導に当たっている。